日本人が日本人に福音を伝える

個人伝道の前に

2010 年 1 月 15 日
西九州伝道所
佐々木正明

「水羊羹が好きだ」小豆の味が程よく、軽く甘く、さわやかに喉を過ぎていくあの感触がなんとも言えないのです。でもおしること、おはぎと、生シュークリームを、さんざん食べさせられた後では、もう見たいとも思わなくなります。

すばらしい福音も、受け入れられる時と場があります。味付けのしかたや、料理のしかたで、好きな人も嫌いな人も出てきます。ただ、のべつ幕なしに福音を語ればよいというものではなく、どんな人にも同じように語ればいいというわけでもありません。

日本人には日本人の特徴があり、日本人の好みと感覚があります。すべての日本人をひとくくりにすることは出来ませんが、やはり、「日本人だ」と言える最大公約数的な感覚だとか好き嫌い、あるいはものの考え方とかいうものがあるのです。

この文章は、最大公約数的な日本人に、福音を出来るだけ受け入れ易いように伝えるには、どうしたらよいかを考えるものです。牛肉をステーキにするか、すき焼きにするか、はたまたタコスにして食べてもらうのがいいか。それとも、ただぶつ切りにして塩茹で出すのが喜ばれるかを、思案をするものです。

ところで、私がここで福音と呼んでいるものの中身は、伝統的なプロテスタント神学で定義付けている福音とは、少しばかり違うものです。言葉の上ではほんのわずかの違いですが、事実はまったく違うものです。まず、そのことをはっきりさせておきましょう。私たちが福音であると信じて伝えようとしているものが、本当は福音ではなかったとしたら大ごとです。「日本産と表示されているウナギが中国産だった」くらいのことでは、すまされなくなります。

一般的なプロテスタントの教えでは、福音とは、罪のないイエス・キリストが罪人の身代わりになり、十字架の上で罪の刑罰を背負って死んでくださったという事実です。また、その事実を信じる者は、ただ信じるということだけで、他にどのような行いも要求されずに、神の赦しをうけ、救われるということです。

ところが私は、それは福音ではなく「福音もどき」だと思っています。本当の福音は、私たちを愛しておられるキリストが、いつでも私たちを救おうとして、待ちかまえていてくださるという事実です。私たちの罪の刑罰を負って、わたしたちの身代わりに死に、甦り、今も生きていてくださるキリストが、いま、私たちの救い主になろうとして、私たちのそば近くにいてくださることです。このキリストを信じるならば、すなわち、信頼するならば、頼るならば、キリストはその信頼を喜んで受け入れ、他には何の要求もなさらずに、私たちを救ってくださるという驚くべき事実です。

私たちを救うのは、キリストが私たちのために死んでくださったという出来事ではなく、死んでくださったけれど甦り、今も私たちを救うために、いつでも近くにおられるイエス・キリストというお方です。また信仰とは、理屈、教え、神学を理解して受け入れる、頭の運動ではなく、何も分からなくても信頼する心の行為、赤ちゃんがお母さんを信頼するのとおなじ、単純に信頼すること、頼ることです。

でもこの福音でさえ、ほとんどの日本人には、大皿に山盛りのおはぎを食べたあとに出された、水羊羹のようです。とても、食べられたものではありません。むしろ、テーブルの上にドカンと上向きに載せられた、豚の頭のようだというべきでしょうか。思わず、ウヘーと思ってしまう代物です。上手に料理さえされていたら、大概の日本人はポークが大好きです。豚の頭を煮込んで作ったブイヨンも。美味しいと言われています。でも、フィリピンの大きなお祝い事には必ずなければならない、あの、テーブルの上にドスンと乗せられた、上向きの豚の頭そのものには、「ウヘー！」です。

キリストの救いは、世界中のどこに生きている人にも、等しく福音です。でもその福音を、どうしても福音と感じられない日本人が多いのです。日本人が福音と感じるのは、他の部分だと思います。日本人にとっては、キリストという名前がすでに、テーブルの上の豚の頭のように不気味なのです。福音が、日本人にも奇異に感じられないように、グロテスクに感じられないように、むしろ、おいしそうに、思わず手を伸ばしたくなるように、テーブルの上に載せられないでしょうか。

キリストという名称には、すでにいろいろな意味合いがくっ付いています。古くは、戦国時代の終わりから徳川時代の初期に至る、カトリックがもたらした「キリスト教」「キリシタン・バテレン」に被せられた、怪しげな、底知れない恐ろしさがあります。明治時代からの、立派な宣教師たちの品行方正、飲むな、吸うな、してはいけない、行ってはいけない、見てはいけないの、いけないキリスト教のイメージもあれば、家族の調和も地域社会の習慣も打ち壊して、自分に都合の良いように「信念に従って歩む」、孤高のキリスト教の姿も思い浮かびます。西洋的なとんがり屋根の教会堂を思い出す人は、もういなくなっ

たでしょうか。でも、キリストと聴いただけで、外国をイメージする人たちが結構いるようです。キリストは外国人であり、16 世紀の半ばに、ザビエルのスーツケースに入れられて、日本に運び込まれた外国の宗教の教祖なのです。

日本人に福音を伝えようとするなら、もっと、日本人に受け入れやすい名前で、語り始めなければなりません。いきなり、キリストでは身構えてしまいます。では、どのような名前で始めるべきでしょうか。やはり、日本人に馴染みのある、「神様」が一番良いでしょうか。神様なら、昔からいろいろな時と所で出現してきて、馴染み深く、違和感がないからです。でも、「神様」という言葉にもいろいろな問題があって、適切とは言い切れないところがあります。とにかく話す者と聞く人が互いに相手を尊重し、共通点から理解をもって話し始めるのが一番です。

そこで今回は、日本人クリスチャンとして、同じ日本人によりわかり易く、より円滑にキリストの福音を伝えることを目標に、どのように話を進めるのが望ましいか、きわめて基本的なことを述べてみたいと思います。もちろん、先に触れたように日本人もいろいろです。甘党があり辛党がいます。同一の日本人なのに、あるときはチョコレートパフェが食べたくなったり、イカの塩辛がほしくなったりもします。ですから、あくまでも最大公約数の日本人を想定してのことだと、ご理解ください。

１．　日本人の宗教心を尊いものとして認めて敵対しない。

日本人はおかしな国民です。ちょっと学問的な言い方をして、「あなたは神の存在を信じますか」と尋ねると、95%前後の人々が「いないと思います」と答えます。ところが、「初詣をする人っ？」とか、「お寺参りをする人っ？」と聞くと、また 95%近くが「はい」と答えるのです。世界で一番唯物論がもてはやされている日本では、神はいないと答えるのが格好良く、あたかも、科学的現代人のように聞こえるのですが、心では神を信じている人が大部分なのです。頭と心が離れ離れなのです。というより、どのように神は存在しないと教えられても、人間は本能的に神を感じ、信じるようにできているために、日本人も、ただ物質と科学の原理だけを説く唯物論では、心が納得しないのです。

このように日本人は非論理的です。とても理屈っぽいように見えながら、実はそうではないのです。日本人に、理屈で神を知ってもらおうとするのは、多くの場合、大きな間違いです。むしろ、心から入っていくべきです。宗教とか神というものは、理屈では理解できないと、日本人は案外正しく知っているのです。理屈で理解できるような神は神ではないと、どこかで感じているのです。そしてその感覚は正しいのです。ところがその正しい

感覚が行き過ぎて、まったく理屈に合わない低級な迷信や新興宗教にはまってしまって、平気でいることもできるのです。聖書の神は、あらゆる意味で無限です。無限の神を有限の人間の頭が把握することも、理解することも出来ないのは当たり前です。だから、頭の理解を超えたところ、心で感じようとしているのです。理屈っぽいプロテスタントキリスト教で、日本人を回心させようとしてはならないわけです。

聖書によれば、人間は神によって造られ、神に似せて造られています。神によって造られた動物の中で、神に似せて造られたのは人間だけです。それは、人間だけが神の本質である霊を与えられているということであり、人間だけが霊的な動物だという意味です。言い換えると、人間だけが霊である神を感じ、神に祈り、感謝をする動物です。一言で言うと人間は祈る動物なのです。祈ることこそ、人間が人間である証拠です。言葉を話すことでも、道具を使うことでも、二本足で歩くことでも、高度に発達した脳を持ち、豊かな知情意を持っていることでもありません。祈ることこそ人間、神を感じることこそ人間、宗教を持つことこそ人間なのです。

ですから、日本人が非常に宗教的で、ありとあらゆるところに宗教施設を作り、何かといえば宗教行事をするのは、当然のことです。神に似せて造られているのです。それを罪あつかいにして、糾弾するのは、欧米キリスト教の間違いであって、聖書の教えではありません。昔、まだ神が人間に聖書をお与えになる前、アブラハムという人は、自分の心に与えられた宗教心を素直に発揮して、多分、土地の人々が礼拝していた神、本当の神ではない神を礼拝していました。でも、そのまじめな礼拝の態度を受け入れて、神は彼を呼び出してユダヤ人の父とし、正しい神のお姿を見せて、信仰の父としてくださったのです。

キリスト教以外の宗教を、すべて偶像礼拝として糾弾するのは、聖書の間違った読み方から来るもので、西欧キリスト教の特徴です。また、西欧キリスト教をそのまま受け入れてしまった、日本のキリスト教の特徴です。聖書が非難しているのは、神がはっきりと、明確に、疑う余地がないほど明らかにご自分を現し、聖書を与えてくださったにも拘らず、その神をないがしろにし、あるいは捨て去り、他の宗教に走ったイスラエル人です。同じイスラエル人であったとしても、まだ神がご自分を現さず、聖書もお与えになっていなかったときのイスラエル人に対しては、たとえ偶像礼拝をしていても、叱責したり非難したりはしておられないのです。ましてや、異邦人が偶像礼拝をしていても、彼らに怒りを発したりはしておられません。聖書を注意深く読むと、すぐに分かることです。それが分からないのは、西欧の神学を学んでも、聖書は学んでいないからです。少々いい過ぎならば、たとえ聖書を開いても、西欧神学の色眼鏡で読んでしまうからだと言い換えましょうか。

アテネにおいて、異邦人の偶像礼拝のまん中に飛び込んだ使徒パウロは、偶像に満ち溢

れている現実に対しては、少なからず憤りを感じながらも、「あなた方を宗教心にあつい方々だと見ております」と、その宗教心についてはむしろ賞賛をしているのです。(使徒 17 : 22) 日本人が宗教心にあつい事実を大切にし、尊敬してあげなければなりません。日本人も、神に創造された人間として、神を感じ、神を礼拝する本能を持っているのです。その本能をあざ笑うのは、本能をお造りになった神を笑うものです。西欧キリスト教の精神で、異邦人である日本人の宗教や宗教心を、罵倒したり、叱責したり、嘲笑したりせず、まず、日本人の宗教心を美しく尊いものとして認め、受け入れてあげることです。そこから、日本人とのまじめな、心の通う、宗教的な話が始まるのです。心が通う話ができなければ、個人伝道は成功しません。

２．日本人が何でも神として崇め拝んでいることに敵対しない

西欧キリスト教から見るならば、日本人は何でも神として拝む愚かな多神教徒であり、すべてのものに神の霊が宿っていると考える、低級な汎神論者であるということになります。また、いろいろな怪奇現象を信じ、説明のつかないことは何でも霊のせいにする迷信的な人々だということになります。そのような西欧キリスト教の見方は、必ずしもすべてが間違いだというのではありませんが、基本的に間違っています。

アニミズムや多神論あるいは汎神論は、より未発達な神意識、より低級な宗教形態であるといって非難するのは、少なくてもキリスト教の理論としては土台から間違っているのです。この理論は、人間がより低級な動物から進化してきたという、進化論の考え方を社会生活や宗教意識、あるいは宗教形態に適用させたものに過ぎないからです。この考え方によると、より発達した人間は宗教を持たなくなるはずなのです。すると、最も高度に発達した動物である人間だけが宗教を持ち、その人間がさらに発達すると宗教を持たなくなると、とても不自然なことを言っているわけです。

西欧プロテスタント神学が構築されていたとき、一般社会では啓蒙思想が発達し、合理主義や自然科学が隆盛を極めていました。当然、神学の世界でもその影響を受けて啓蒙的・合理的考えがもてはやされ、自然科学に迎合した神学になりました。たとえ自然科学の考え方には反対する人たちでさえ、自然科学の言葉をもって語らなければならなくなり、だんだん、自然科学的な聖書の読み方になってしまったのです。彼らによると、天使だとか悪霊などは迷信に過ぎないのですが、聖書によると、それらは現実の存在です。聖書の世界観は、近代科学の衣を着た唯物論の世界ではなく、むしろアニミズムの世界なのです。この世界には様々な力を持った悪霊がいて、雑多な小悪霊から、かなりの権威と力を持った悪霊まで、ヒエラルキー的構造を持っているらしいのです。

日本人にとって神とは、もともと単に「かみ」つまり「うえ」という意味にすぎませんでした。神＝かみ＝上＝守（他に官、長、伯、卿、頭、督など）＝髪（髪の毛すなわち上の毛）なのです。普通の人間よりもちょっとばかり力を持ったものは、みな神と表現できたのです。いまでも、少しばかり料理がうまければ料理の神、いささかでも魚釣りが上手なら釣りの神になれるのです。日本人が言う「神」とクリスチャンが使う「神」の、定義がまったく違うことに気付かなければなりません。

そしてまた、聖書が書かれた時代、聖書が書かれた土地にあった世界観と宗教観は、現在の日本の状態に近いのです。聖書が命じていることは、そのようなアニミズム的世界観と宗教観を捨てて、唯一の真の神だけを信じる、一神教の信徒になることではありません。多くの神々の中で、ただ、イスラエルにご自分を現してくださった神、エジプトから救い出してくださった神だけに頼り、この神だけを礼拝することでした。私たちの神は、ちょっとだけ高い「かみ」ではなく、高い高い高い、無限に高い、あらゆるものを超絶した神なのです。

すべてのものに神性を認める汎神論的理解も、決して聖書から遠く離れたものではありません。むしろ、一切の「神的存在」を認めない近代の唯物的世界観のほうが、よほど聖書からかけ離れていることに、気付かなければなりません。聖書によれば、私たちの神はどこにでもいらっしゃる神です。地に深く穴をうがちその中にもぐりこんでも、地球を離れてどこか違う天体に飛び出しても、そこに神はいらっしゃるのです。神は、すべてのものの上にあり、すべてのものを貫き、すべてのものの内におられる方なのです。(エペソ４：６）

神はすべての次元を超越し、すべてのものをご自分の内に納めておられる方です。神があらゆる存在物をお造りになったとき、私たちが犬小屋を作るときのように、自分たちの外に、自分たちにあい対する「対象物」としてではなく、ご自分の内に、ご自分から出ることの出来ないものとして、お造りになっているのです。つまり、この宇宙の中に神がいらっしゃるのではなく、神の中にこの宇宙があるのです。私たちは神の中に生き、動き、また存在しているのです。(使徒 17 : 28)　神は、時間と空間と物質の世界を超越し、いくつもの異次元をまたいで存在し、治めておられるのです。

日本人があらゆるものの中に神性を認め、神として崇めてきたことは、確かに間違っています。しかしそれは、愚かなことではありません。むしろ、非常に賢かったのです。あらゆる存在物は神によって造られ、神のうちにあり、神が内におられるのです。神がいらっしゃらない空間はなく、神が存在しておられない物体もないのです。そのようなことは、聖書を与えられていた人々でさえ、今までほとんど理解できずに来たのです。聖書を持た

なかった日本人が、理解しなかったのは当然であり、むしろここまで理解してきたことが、素晴らしいのです。

日本人が美しいものに感動し、厳かな雰囲気に神を感じ、木に岩に注連縄（しめなわ）を張ってきたことを、むしろ積極的に評価すべきです。わたしたちもまた、木も岩も、幽玄壮大な森も清らかな流れも、神がお造りになったものであり、お造りになった神の姿を反映していることを語ればいいのです。日本人に天地創造の神を伝えようとするとき、決して日本人の宗教心や神概念を軽蔑してはいけないわけです。むしろ、聖書がなくてもここまで理解してきたことに、尊敬を持って語り合うことが肝要です。尊敬を持って認められると、人は心を開くのです。心が開かれると会話ができます。会話が出来て伝道が可能になるのです。

３．日本人の宗教行事に反対しない

日本にもずいぶん様々な宗教行事があります。欧米キリスト教の教えによると、そのような行事にクリスチャンが参加することは、偶像礼拝の罪、すなわち、「ねたむ神」の怒りを引き起こす、もっとも汚らわしい罪となります。でも果たして、聖書はそのように教えているのでしょうか。

「神の民」イスラエルは、天地創造の神だけを礼拝する国民、「神の民」にされていました。そこに、異教の神々や、礼拝と祭りの習慣を持ち込むことは、神をないがしろにする背教の大罪でした。ただし、偶像礼拝の禁止が、エジプトの奴隷状態から救い出された後のイスラエルに与えられ事実を、決して忘れてはなりません。イスラエルは、神の明らかな自己啓示と救いを体験しただけではなく、律法も与えられたのです。ところが、出エジプト以前のイスラエルには、偶像礼拝禁止の命令は与えられていなかったことに注目しましょう。そのときまで神は、イスラエルの偶像礼拝を、忍耐と寛容をもって許しておられたのです。

私たち日本人は、神の自己啓示も奇跡的助けも体験していません。律法も与えられておらず「神の民」ともなっていません。いわば、アブラハムの時代の人々、イサクやヤコブの時代の人々と同じなのです。パウロは偶像礼拝をしていた異邦人を嘲笑することも、罵倒することもありませんでした。かえって、パウロが正しい神知識を語り聞かせたそのときまで、神は忍耐をもって間違った神礼拝を見逃して来られたと言っているのです。わたしたちがすべきことも、日本人を偶像礼拝者として非難し、嘲笑し、軽蔑し、罵倒することではなく、正しい神知識を伝えることです。私たちは、イスラエルのような神の民の中に偶像礼拝を持ち込もうとしているのではなく、異邦人である日本人の中に、真の神礼拝

を持ち込もうとしているのです。まったく状況が違うわけです。事情が正反対です。

私たちは、天地創造の神を、日本の宗教に敵対することによってではなく、日本人の宗教心を大切にし、その宗教心を通して理解することができるように、受け入れることが出来るようにと、配慮をもって紹介しようとしているのです。他の宗教を憎み、他の神々を礼拝している人々を滅ぼそうとする、怒りの神を持ち込むのではなく、たとえ、無知のために誤った神理解と誤った神礼拝をしていたとしても、日本人を愛し、日本人を救おうとしておられる、愛の神を紹介しようとしているのです。日本人は神に似せて造られたものとして、神を礼拝したいという本能を素直に表現しているのだからです。

明らかに悪霊を礼拝している宗教行事に、一般の参列者として参加することは、避けたほうが賢明だと思います。たとえ、自分はその悪霊を礼拝していないとしても、注意が必要です。ただし、すべての非キリスト教的宗教行事が悪霊を礼拝していると考えるのも、聖書の教えではありません。そのあたりは、クリスチャンとしての常識と、霊的判断力が必要でしょう。一般的に言えるのは、日本古来の宗教である一般民衆の素朴な神道の行事は、決して悪霊を礼拝しているのではないということです。時には、そのような場を悪霊が用いることがあったとしても、あまり恐れることではありません。私たちが恐れ、徹頭徹尾敵対しなければならないのは、むしろ、現代の教会の中に巣くっている、資本主義自由経済と名を変えてはいるけれど、キリストにマモンの神と呼ばれた悪い霊でしょう。

私たちは異教の地、異邦人の文化の中で、天地創造の神を紹介しようとしているのですから、あらゆるきっかけと機会を用いるのです。使徒パウロは、コリントの人々が偶像の神にささげた肉を食べることに、警告を発しています。（Ｉコリント 10：14～21）　他の箇所でパウロが語っているところと比較して読むと、これは、偶像の宮から下げられた肉を食べることではなく、多分、偶像に捧げられた肉を偶像の宮で食べることであると理解されます。（Ｉコリント 8：10）　クリスチャンになりたての人々、あるいは偶像礼拝と真の神礼拝との境目に関心を持たず、不注意に偶像礼拝と関係を持っている人々に対する、パウロの警告です。実際、アテネの町の状況では、町全体が偶像の宮のようなものであり、偶像の宮に入るなということは実情にそぐわなかったのでしょう。豊田市に行ってトヨタと関係を持つな、日立市に行って日立とは関わるなと言うのと等しいものです。あるいは天理市に住む者に、天理教とは関係を持つなと言うのと同じだったのでしょう。

日本に住んで、日本の宗教行事に関わるな、敵としろ、町内会の集まりにも寄付金にも応じるなというのは、みな、日本人を敵に回して戦う西欧の宗教で、キリストの教えでも聖書の教えでもありません。私たちはむしろ、日本人の宗教意識を大切にし、彼らの心と習慣を受け入れ、温かい人間関係を築きながら、正しい神意識と神礼拝を伝えるきっかけ

と機会を作るべきです。特に、その土地に生まれた者はだれかれ問わず、みな氏子として受け入れる心の広い「氏神様」は、すべての人々を恵み、受け入れ、場合によっては人類を子とさえ呼んでくださり、救いに入れたいと願っておられる、私たちの神を紹介するには「もってこい」です。収穫を祝い感謝する豊年祭り、秋祭り、あるいはゆたかな実りを願う春祭りなどは、よい者にも悪い者にも、太陽を昇らせ雨を降らせて下さる神、（マタイ 5：35）　恵みをもって、天から雨を降らせ、実りの季節を与え、食物と喜びで・・・・心を満たしてくださる神について語る、（使徒 14：17）　絶好の機会です。

仏僧でありながら神道的な心を持っていた西行法師は、「なにごとのおわしますかは知らねどもかたじけなさに涙こぼるる」と詠いました。それは、日本人の宗教心を最もよく表した言葉であると言われています。聖書を持たない日本人は、誰かということは知らないままです。ところが、知らないまま、知られない方に涙をこぼして感謝をするのです。これは、聖書の教えに非常に近い神意識と、礼拝の心です。繁栄の福音という名のご利益主義に成り下がったペンテコステ信仰などでは、とても理解できない純真な礼拝です。そして聖書の神は、まさに知られない神なのです。どれほど明白に聖書に教えられていても、無限の神はあくまでも知られない神なのです。私たちは、日本人と共に、おなじ心で、知られない神を礼拝できるのです。

４．見えない神を見えない神として拝んでいることを賞賛する

モーセを通して与えられた十戒は、偶像を作ること、またこれを礼拝することを厳しく禁じています。神を見失った人間は、どうしても礼拝の対象物を作りたいと願うらしく、世界中の宗教の多くは偶像を持っています。キリスト教と言われる中でも、カトリックは堂々と偶像を掲げ続けています。ロシア正教はイコン礼拝を止めようとしません。ところが古来の神道は、本来偶像というものを持たないのです。中には偶像に近い礼拝対象を持つ民間神道もありますし、仏教と混合して偶像を持つようになった神道もありますが、基本的に偶像を持たないのが神道です。見えない神を見えないまま拝んでいるのが神道なのです。

パウロは見えない栄光の神を、見える形にして拝む人間の愚かさを糾弾し、その愚かさのために、神は人間を欲望のままに任せられたと語り、その結果、人間はあらゆる罪に陥ったと教えています。ところが、日本の神道は偶像を持たず、見えない神の栄光を見えないまま拝んでいる、数少ない宗教の一つなのです。日本人の道徳的高さ、倫理的美しさは、あるいはこのあたりにも関係があるのかも知れません。多くの日本人には、かすかであっても、見えない神が見ていてくださるという感覚があるのです。これだけの人口を持つ一つの国民が、これほど高い倫理道徳を持つのはまれなことです。その高さは、多くのキリ

スト教諸国、特にカトリックの国々よりもよほど高いのです。海外旅行をして分かるのは、日本は最も安全な国の一つだということです。私たちは、日本人のこの素朴な礼拝の心を大切にしながら、福音を語りたいと思います。

表面的に日本人の宗教心を見ると、山の神、川の神、太陽の神、木の神、岩の神、さらには様々な動物の神々、それから、古事記や日本書紀に見る神話の数々と、まさに愚かとしか言えないようなところが目に付きます。目に見えない、奥ゆかしく神秘に包まれた神、恵みに富み、大きく不思議な神を、何とかわかり易く表現しようと試みると、なんとも下等な神々になってしまいます。人間の頭脳ではとても理解も把握もできない、無限の見えない神を、無理やりに説明しようとすると、とたんに、ばかばかしい神々に成り下がってしまうのです。それがあまりに愚かに見えるために、日本人の多くはいともたやすく、一足飛びに無心論者になってしまうのです。このあたりの幼稚さをとらえて、日本人の宗教心の曖昧さを攻撃するのは、伝道の方法としては賢いことではありません。それは、見えない神、分からない神に何とか少しでも近づきたいという、人間の願望の表現として理解すべきです。

たとえ聖書があり、崇高な神、絶対無限の見えない神を明確に教えられているキリスト教でさえ、聖書を忘れ、神を離れて神が分からなくなったとき、偶像を作って拝もうとしました。今も聖母マリヤの像、キリストの像、諸聖徒の像、天使の像が刻まれ、拝まれ続けているのです。その愚かさに比べると、日本人の素朴な宗教心の愚かさは、まだまだ許せると思います。伝道しようとするとき、相手の弱いところや間違っているところを指摘して、攻撃するのは良くありません。むしろ良いところ、美しいところ、クリスチャン信仰との共通点を見つけ、そこから話し出して、天地創造の神を紹介すればよいのです。

人間の目に見えるものが、いかに限られたものであるかを、説明してあげましょう。目に見えるということは、目の能力の限界にとどめられるということです。目は光だけ、しかもその一部だけしか捕らえることができません。物質の中には、光には反応しないものもたくさんあります。現在の進んだ物理学の世界では、私たちの目で捕らえられるもの、あるいは科学的な実験や用法で、存在を確かめられるものは、全宇宙の存在（物）の中のわずか４％弱だといわれています。96%以上は、まだ「物」であるかどうかさえわからない、仮に「暗黒物質」と呼ばれている存在なのだそうです。聖書は、私たちの神を霊的な存在であり、目で捕らえることが出来ない方であると教えています。つまり、物ではないのです。物質の世界にとらわれない方で、時間と空間と物質という次元を超越した方なのです。だからこそ、無限に大きい方だといえるのです。目に見えないものは信じられないと、科学的であることを誇っている人がいますが、まさに非科学的なことを証明しているに過ぎません。

日本古来の宗教であり、いまでも日本人の心が寄り添う神道は、偶像を拒絶し、見えない神を見えないままに拝む宗教です。ちなみに、名のある神社を訪れて、よく観察するとよいでしょう。宮司さんに尋ねてみるのも良いでしょう。ご神体はありますかと。ほとんどの場合、ご神体を持ちません。神を象徴するもの、神の臨在を象徴するものを、依り代として置いてあったとしても、ご神体はないのです。それはイスラエルの民が、幕屋の中に神の臨在を象徴する至聖所を持ち、その中に契約の箱を安置していたのに似ています。見えない神を礼拝する神道の態度の素晴らしさは、賞賛に値するものです。見えない神に心からの感謝を捧げる習慣を、長い間持ち続けてきた日本人こそ、敵対的な語り方さえしなければ、目に見えない無限の存在者である、天地創造の神を信じられるはずなのです。

５．日本人の唯一神的感覚を大切にする

日本は八百万の神々、多神論、汎神論、アニミズムの世界です。いたるところに神々が存在し、どこにでも霊が飛び回り、魑魅魍魎（ちみもうりょう）が徘徊する世界です。ところが、日本人には非常に強い一神論的感覚があることにも、気付かなければなりません。西欧キリスト教の宣教では、日本人の宗教心の間違いや弱点、あるいは欠点にばかりに注目し、これを稚拙だと攻撃し、論駁することだけに注意を集中します。日本人の宗教意識に潜む美しさ、崇高さ、聖書が教える真理への近さなどには、ほとんど気付かないままに来てしまったのです。

日本人が、たくさんの神々がいると言うのは、決して聖書の教えに反するものではありません。確かに聖書は徹底して、神は唯一であることを教えています。ところが一方では、旧約聖書も神々という言葉を幾度も使っているのです。当時のイスラエルの周辺にいた人々の神の定義によると、この世界にはたくさんの神々が存在することを認めているのです。日本人の神の定義を使うと、まさに日本にはたくさんの神々がいるのです。聖書が教える天地創造の神の定義と、日本人の神の定義が同じであるという誤った前提で、話を進めてはならないわけです。日本の神の定義では、人間よりもいくらかでも上の、あるいは不思議な力を持つ存在は、何でも神になり得たのですから、それこそ、魑魅魍魎といわれる様々な霊も、神々になり得たわけです。聖書が認めている様々な悪霊も、日本的な感覚では悪い神々、あるいは荒ぶる神々であり得たのです。

大切なことは、そのような雑多な神々の存在を認めながら、日本人はその中に、あらゆる神々を陵駕し、超越する、もっと大きな存在を感じているという事実です。説明は不可能でありながら、日本人はそのような大きく、強く、恵みに富む存在を神として直感的に認めてきたのです。それは、日本人の神礼拝を観察するとすぐに分かります。ご存知のよ

うに、日本には非常に多くの神社があります。大きく有名なものだけでも、相当の数にのぼります。それぞれの神社は、各々にいわれのある神々を祀っています。ところが参拝に行く日本人は、祀られている神がなんと言う神だなどということには、ほとんど関心を払いません。どんな神でもいいのです。どこの神社でもどの祠（ほこら）でもどこの社（やしろ）でもまったく同じ気持ちで参拝し、まったく同じ態度で礼拝するのです。たとえ、祀られている神々が異なっていても、その祀られている神の背後には、さらに大きくさらに高い恵みにあふれた同じ神、一人の神がおられるに違いないという、不思議な感覚があるのです。一休和尚は、日本人の宗教心を上手に表わして、「分け登る麓の道は多けれどおなじ高嶺の月を見るかな」と詠いました。

日本人はたくさんの神々を認めていながら、大きな大きな一人の神を背後に感じているのです。それは多くの天使や悪霊、すなわち人間より強い存在、日本語の「神」の定義に当てはまる存在を信じていながら、その背後に絶対に大きな神を信じていたイスラエルの信仰、あるいは初代のクリスチャンたちの信仰とあまり違わないのです。唯一の神だけを認めて、後はどんな霊的な存在も認めないのは、啓蒙思想に毒された考え方で、聖書の教えからは程遠いものです。日本人は、かなりおぼろげではありますが、すべての霊的存在、神々と呼ばれているものたちを超越した、大きな方を感じているのです。日本人が感じているその方こそ、わたしたちの神なのです。そして、この大きな神を信頼するならば、他の様々な神々、悪霊たちの存在など物の数ではなくなり、恐れることもなくなるのです。私たちがすべきことは、日本人が心の奥底で感じている大きな神が、聖書の教える天地創造の神であり、恵みと憐れみに富み、人間を救おうとなさっている神であることを知らせることです。この神に信頼して生きるように励まし、信頼は祈りによって表現されることを教えて、一緒に祈るのが一番よいのです。

日本の主神は太陽であり、天照大神であるといわれることがあります。確かに日本人は太陽を拝みます。でも、太陽そのものを神と感じて祈っている人はまずいません。むしろ、すべてのものに勝る存在の象徴として、太陽を礼拝していると言ったほうがよいのです。すべてのものに勝る方が、姿を見せてくださらないために、太陽にその姿を見ようとしているのです。わたしたちクリスチャンが信じている神は、世界中に太陽が一つであるように、唯一の超越神であることを教えればよいのです。

６．昔から日本にいて日本を祝福し日本を愛してこられた神を認める

日本人は日本の神々、あるいは日本の神を信じています。キリスト教の神は外国の神だと考えています。多くの日本人は外国の神を信じる必要性を感じません。日本の歴史と、

西欧のキリスト教諸国の歴史を比べて見ても、日本が劣っているとは思えません。少しばかり頭に血が上った秀吉が、朝鮮を攻めた蛮行はありましたが、十字軍のような愚かな戦いをしたことはありません。八紘一宇、（はっこういちう）大東亜共栄圏などと称して、アジア太平洋諸国を支配しようとした事もありましたが、西欧キリスト教諸国の残虐な植民地政策に比べると、子どものようなものです。キリスト教諸国の人々が、日本人より高度な倫理観を持っているとも思えません。

日本人の多くは、非常におぼろげではありますが、昔から日本にいてくださり、日本を祝福してこられた神を崇めているのです。太陽を昇らせ、四季を与え、雨を降らせ、山や森を緑で包み、美しい花を咲かせ、豊かな稔りを来たらせ、生き物に命を与えて増やし、海や川にはたくさんの魚を泳がせて、人々にただで与えてくださる神を感じ、良くは分からないけれど、それぞれの方法で感謝を捧げ、喜びを表現してきたのです。この日本にずっといてくださった神、日本を祝福してきた神こそ、私たちクリスチャンが信じている、天地創造の神なのです。

私たちの神は天地を造り、はじめからこの世にいてくださった神です。中東やパレスチナ、あるいはトルコやギリシャやローマなど、聖書地理に出てくる土地だけにおられた神ではなく、日本を含む世界中いたるところに、天地創造以来ずっといてくださった神です。この世にいてくださったのに誰にも知られず、理解されなかった神です。（ヨハネ 1:9）　日本でも、神代の時代のもっともっと昔から、ずっと日本をご覧になり、日本人を見つめ続けてきてくださった神です。日本人はこの神の中に生き、動き、活動してきたのです。日本人はこの神を知らないまま礼拝してきたのです。（使徒 17：28）

キリスト教の神は1549年に、イエズス会の宣教師ザビエルのスーツケースに入れられて、鹿児島に上陸した神かもしれません。しかし、天地をお造りになった神は、天地創造のとき以来、ひと時も日本を離れることなく、日本を祝福してきてくださった神です。日本人を愛し、日本人のためにもみ子キリストを十字架にかけてくださり、日本人を無代価で救いに入れようとしてこられた神です。知られないまま、日本人に崇められ、拝まれてきた神です。西欧キリスト教の宣教では、日本の神を敵としてこれを滅ぼそうとしますが、私たちはそのようなことをする必要はありません。日本人が崇めてきた神こそ、私たちの神であることを認め、日本人が知らないで拝んできたところを、聖書を通して明らかにして、誤っているところを、優しく丁寧に落ち着いてゆっくりと正してあげたら良いのです。（使徒 17：23）

ですから私たちは、日本人が極めて日本人らしい意識で感じてきた神を、単に偶像だと決め付けず、日本人がその神を崇拝し礼拝している態度を、偶像礼拝の罪だと決め付けな

いようにしましょう。彼らの中にある真摯な神意識を正しく認め、彼らが拝んでいる神が私たちの神である可能性が非常に高いことを認めて、尊敬と友好的態度でお話しましょう。私たちは、自分が知っている物事をまったく知らない人に説明するとき、よく「・・・・のように」という言い方をします。「雪のように白く」とか、「母親のように優しく」、「リンゴのように甘酸っぱく」というようにです。知らせようとする人とまだ知らない人が、共通して知っているものを理解の橋渡しにするわけです。日本人が崇拝しまた礼拝してきた神を否定して、日本人が知らないまったく新しい神として天地創造の神を紹介することは、せっかくの橋渡しをわざわざ壊してしまうことです。

「私たちの信じている神は、多くの日本人が信じてきた神とおなじだと思えるのです。昔、神代の昔から日本にいてくださり、日本を慈しみ、日本人を愛し、豊かに恵み、雨を降らせ、穀物を稔らせ、家畜を増やし、海を魚で満たしてくださった神が、私たちの神だからです」と、どうして言えないのでしょうか。日本人が大切にしてきた見えない神こそ、私たちの神です。日本人の心の奥底にある神、すべての神々を陵駕する高く大きな神、唯一の神こそ私たちの神なのです。

７．理屈を越えた神、心の神を大切にする

プロテスタントの神は、理屈の神です。神学の神です。いろいろ理屈を捏ね回し哲学を駆使して、合理的な頭に訴える神です。理性を持って頭の理解と同意を求める神です。日本人的な観念論や、心情的な感覚を受け入れない、形而上学的真理の神です。空論に走る青年がもてあそぶには面白い神、ホワイトカラーには少し似合って、学校の先生や公務員などには受け入れやすいところもある神です。ところが、宗教については頭で考えるより心で感じることを重んじる、情緒豊かな大部分の日本人には、とても追いついて行けない神です。

プロテスタントの神学によると、救いは信仰だけによるのですが、その信仰だけに到達するまでに、多くの学びと理解と理論的飛躍と、情緒的月面宙返りをくり返さなければなりません。この広い世界には、神という存在は一人しかいないことを認め、その神が、三位一体と言われる三つの神格を持つ神であることを、信じなければなりません。天地の創造者であることを信じ、進化論は捨てなければなりません。さらに、アニミズム的世界観を捨て、キリスト教的唯物論とも言えそうな、合理主義的理屈を受け入れなければなりません。神が愛であり、聖であることを信じ、その愛と聖のゆえに罪人を救うためには、救い主の十字架の死が必要であったという理屈を理解し、受け入れなければなりません。その上、自分が救われなければならない罪人であることを認め、へりくだって罪の告白をし、悔い改めなければなりません。自分には自分を救う力がまったくないと信じて、惨めな罪

人であるわたしを救ってくださいと、神にお願いしなければなりません。そうしなければ、救われないのです。その神の祝福を受けるには、いままでなじんで来たすべての神々を捨て、あらゆる宗教行事から身を引かなければなりません。これはもはや、信仰による救いではなく、学びと理解と、理論的跳躍と感情抹殺による救いです。

日本人がクリスチャンになれるまで導くためには、それほど多くの難関を通り抜けさせなければなりません。個人伝道は、この上なく困難な働きになってしまいます。並みの信徒には、「とてもじゃないけど無理」な仕事です。だから、ますます日本人の伝道は困難になり、教会の成長はおぼつかなくなるのです。

多くの日本の宗教学者は、日本でキリスト教が伸びないのはあまりにも理屈っぽいからだと、異口同音に言っています。聖書が教える信仰は、頭で理解して受け入れる信仰ではありません。むしろ、心の信仰です。心にすとんと落ちて、信頼できるのです。聖書の神はあまりにも大きくて、小さな人間の頭の限界をはるかに超えた方です。神の救いのご計画、神のみ心は神の霊以外には理解できないのです。（Ｉコリント２：11）　でも、神に似せて作られた人間の心、神とおなじ霊性を備えている心は、霊である神を感覚で理解できるのです。信じ受け入れることができるのです。赤ちゃんが感覚でお母さんを理解し、信じ受け入れるのと同じです。

本来、救いとは信仰によるものであり、信仰だけによるものです。信仰とは信頼のことです。神に頼るということです。神を理解することでも、神がしてくださったことを理解することでもありません。アニミズム的な世界観を捨てることでも、クリスチャンらしい生き方を身につけることでもありません。キリストの十字架が自分の罪のためであったと理解し、信じることでもありません。ただ、神の愛と哀れみ、お心の広さに信頼するだけです。信頼するとは心の動き、心の行為です。

私たちの救いは、私たちが神の贖いの働きを理解することによって達成されるのではありません。あくまでも、わたしたちが神に信頼することによって、達成されるのです。私たちを救うのは、キリストの十字架ではなく、神です。神が独り子キリストの十字架の贖いを通して、救いを可能にしてくださったのです。私たちはキリストの贖いも十字架も知らないままで、キリストの十字架の功績のゆえに救われるのです。私たちがキリストのみ業を知らなくても、神は十字架による贖いが完成していることをご存知なのです。

アブラハムは信仰によって義とされました。彼の信仰が受け入れられたのです。アブラハムの知識と理解が受け入れられたのではありません。アブラハムはキリストのことを知りませんでした。十字架も知りませんでした。しかし、神がご存知だったのです。キリス

トを知らなかったアブラハムも、キリストの十字架の贖いのゆえに、義と認められることが出来たのです。私たち日本人は異邦人です。私たちは律法を与えられているユダヤ人のように取り扱われるべきではなく、むしろ、律法を与えられる前のユダヤ人のように、アブラハムのように取り扱われるべきなのです。

私たちが神の聖さと愛を完全に理解し、キリストの謙遜と受肉と従順を余すところなく把握し、十字架の意味と力をことごとく知るなど、どんなプロテスタント神学によってでも、絶対に不可能です。私たちの知るところは極めてわずかです。私たちが知ることによって救われる、あるいは理解しなければ救われないとするならば、この広い世の中に救われる人はただの一人もいないのです。

日本人の宗教観は、理屈の問題ではなく心の問題です。理屈や理論はどうでもよいのです。神はそのようなものを超越していると、どこかで感じているからです。そして、それこそ聖書が教える信仰なのです。私たちは頭に訴える伝道ではなく、心に訴える伝道をするように心がけるべきです。理屈では、神の存在を説明するだけで大変なことです。本当のところ、どんなに時間を費やしても不可能なのです。でも、誰の心にも神を感じる部分、神を礼拝する本能があるのです。それに訴えるなら、理屈を越えて神を信じることができるのです。人間は、理屈や理性とは関係のない決意も決断も選択もするのです。

理屈ではないというのは、ちょうど結婚のようなものです。だれも、結婚相手のすべてを理性的に理解して結婚するのではありません。頭では理解できなくても、心が決断をして信頼するのです。知的理解を後ろに置き、情緒的で感情的な決断、反理性的で不合理な決断を先行させて結婚するのです。その結婚ができるほどの人なら、だれでも、神を信じる決断ができるはずです。結婚も信頼、神を信じることも信頼。反理性的であることが正しいのです。その正しいことが間違って使われると、まったくくだらない巷の占いを信じたり、ばかばかしい新興宗教の餌食になったりもするのです。そのような反理性的な人たちも、ひとたびキリスト教に接すると、とたんに理論的な、理知的な人間であるかのように振舞うのです。それは、西欧キリスト教の接し方が間違っているためです。

私たちは頭による、理論的な伝道ではなく、心による、情緒的な伝道を心がけるべきなのです。

８．アニミズムの世界観を認めて軽蔑しない

日本人の宗教観の表面だけを見ると、実にばかばかしいと思えるものです。神々があり、呪いがあり、たたりがあり、悪霊が出没して人間にいろいろな悪事を働くかと思うと、時

には善良な霊も訪れて良いこともします。霊の世界と人間の世界が、どこかで繋がっているのです。因縁深いところには幽霊が出没し、怪奇現象が恐怖心を駆り立てます。生の世界と死の世界が隣り合わせで、完全には分かれていないのです。こんなものは、整ったプロテスタント神学から見ると、お話にもなりません。それで私たちは、唯物論だ進化論だと理屈を振り回している日本人が、どうしてこれほど低級な宗教観しか持てないのかと、ついつい怪しみ軽蔑してしまいます。

ところが西欧プロテスタント神学を横において、聖書の記述からだけ考察をしていくと、日本人の宗教感覚は少しも怪しいものではなく、むしろ自然で、とても納得の行くものです。聖書の世界観は、旧約聖書も新約聖書もアニミズムの世界で、日本人の世界観と良く似ているのです。聖書の世界から、天地の創造主である神を取り除くと、ほとんど日本人の「低級な」世界になるのです。旧約聖書の神の人たちも、様々なまじない師や妖術家、夢と幻を解く人々や不思議な業を行う人々に、取り囲まれて生きていました。新約聖書の弟子や使徒たちも、そういう人々の中に生きながら、一方では悪霊と戦ったかと思うと、他方では幽霊を恐れて震え上がっています。

聖書は、動物以外にも、かなり高度な知的能力を備えている、み使いとか悪霊の存在を認めています。彼らは肉体を持ちませんから動物ではなく、物質の限界を超えています。人間は動物として肉体を与えられ、物質の限界の中に生きていますが、一方では神に似せて霊的な存在として作られた唯一の動物です。人間はその霊的性質のために、物質の世界に生きながら霊的な世界を感じることができるのです。たとえ知的には理解できないとしても、感覚として、通うものを持っているのです。すべての人間には、神を感じる感覚、宗教的な本能があるのです。またすべての人間は、霊的なことを感じ考える本能を持っているのです。そのために、どこの世界でもいつの時代でも、幽霊や悪霊の話があり、それらを恐れています。霊的性質を持っていない動物たちが、そのような霊的なものを恐れることは、普通ではあり得ないのです。もちろん幽霊物語や怪奇現象を、すべて事実として認めるというわけではありません。不思議な出来事や理解不能な事柄に対する恐怖心と、好奇心が作り出したものがほとんどでしょう。ただ、人間がそのような話を信じがちなのは普遍的事実であり、人間の霊的性質を示しているものです。

このような霊的な世界を認めるというのは、現代的な言葉を使うと、異次元の存在を認めることです。聖書はもともと異次元の世界から始まる書物です。神ははじめに天と地を創造されたという記述は、神という存在が物質と時間と空間をという次元に捕らわれない、超次元の方であることを示しています。さらに聖書は霊的な世界を認め、天という次元を認め、死後の世界を認め霊的な世界の実在を認めるなど、いまの私たちが生きている次元とは異なった、別の次元の世界を認めているのです。

現代の進んだ理論物理学によると、どうしても異次元を想定しなければならないのだそうです。空間的な場所で言うと、まさに私たちが生きているのと同じこの場所に、４次元、５次元の世界が存在し、その４次元あるいは５次元の世界の中に、いま私たちが生きている世界と類似した、３次元の世界が存在する可能性もあるというのです。素人の私たちには何のことやら、さっぱりわからず、迷うばかりですが、３千年以上も前から書かれている聖書は、初めから異次元の世界があることを前提に書かれているのです。その異次元が、わたしたちの頭脳の限界をはるかに超えているために、私たちにはまったく理解できないのですが、神に似せて造られている霊的な性質は、本能的に霊的世界という異次元を感じ取っているのです。

欧米の啓蒙主義的、あるいは合理主義的キリスト教神学では、幽霊だとか、魔術だとか、呪いだとか言うものに、ほとんど興味を示しません。ところが、日本のようにアニミズムの世界観の文化では、そのようなものが実在するのです。実際には、キリスト教文化と言われている欧米諸国のどこに行っても、幽霊の話やまじないの話、のろいや祟りの話があり、アニミズムの世界なのですが、合理的なキリスト教神学ではそれを認めたがらないのです。科学的には、霊の世界が存在することも存在しないことも共に証明不可能です。しかし、霊的な現象として、また、霊的な感覚として、人々の生活の中に実在しているのです。日本の文化では、聖書が書かれた背景の文化と同じように、私たちが生きている世界は物質だけの世界ではなく、霊的な存在者たちが活動する世界でもあるのです。

欧米プロテスタント神学で軽蔑される、そのような事象を上手に取り扱うことは、日本の伝道に欠かせません。多くの日本人が科学的であると自称しながら、一方ではそのようなものを恐れ、惑わされ、大金と労力を費やしながら生きているのです。日本人が矛盾しているのではなく、科学では割り切れないものを、霊において感じているのです。私たちは、それらを低級な迷信として退けてはなりません。それは日本人の感覚をあざ笑い軽蔑することになり、会話は途切れ、伝道の機会は失われてしまいます。たとえ、話している相手が、「そうですよね」とうなずいても、悪霊や幽霊が存在していないというプロテスタント神学には納得せず、恐怖もなくなっていないからです。

また幽霊の話や悪霊の話、呪いや祟りの話に怖がってもなりません。聖書が示している通りに行動すればよいのです。それらが人間に対して害悪を及ぼしているならば、大胆にキリストの名によって追い出し、静かにしているならばこちらから何もする必要はありません。ただ、私たちの内に住んでいてくださる方は、悪霊どもの頭であるこの世の君よりも強いのです。（Ｉヨハネ 4：4）　そのことをしっかりと話し、伝えればよいのです。私たちを愛していてくださる神が、悪霊や幽霊、呪いや祟りのたぐいから守ってくださること

を、確信をもって明確に語り、すべての権威を超越しておられる神に信頼するように励ましてあげればいいのです。聖書には悪霊やまじない師たちに勝利をした話が、たくさん記されているのですから、充分に説明できるはずです。

９． 感謝して信頼して生きる

日本人が信じている神は、基本的に善良な神です。悪霊も、幽霊も存在し、天変地異をもたらす荒ぶる神もいますが、日本人が崇め感謝しているのは善良な神です。太陽を昇らせ、四季を与え、作物を育て、動物を増やし、海や川を魚で満たしてくださる神が、普通の日本人が心に感じている神です。無知のために、まるでたくさんの神々がいるように思い込み、それぞれに異なった名前を与え、役割分担まで想定しているようですが、要するに、良くはわからないけれど、人間に必要なものを与えてくださる善良な神を感じているのです。日本人は、この神に向かって感謝を捧げながら生活しています。いつも、いつも「神様、神様」と言いながら生活しているのではないにしても、折にふれ、感謝を捧げ、神の前に祝いを設け、祭りをして、みんなで生きているのです。

日本人の神は、「あれをしてください。これをしてください」とお願いする神であるよりは、「あれもありがとうございます。これもありがとうございます」と感謝を捧げる神です。もちろん、困ったときの神頼みでお願いもするのですが、むしろ、生かされていること、食べさせてもらっていること、平穏に生活できることを感謝する対象です。ご利益信仰は、そのような古来の素朴な信仰に満足できない人たちの願い、あるいは欲望の表現として、主に、新興宗教の中に見られるものです。

私たちは日本人のこの宗教感覚を高く評価し、賞賛すべきです。ご利益信仰に流れて新興宗教に入っている人たちでさえ、ご利益信仰をあまり高く評価していないのです。目の前の困難のために新興宗教に入ったとしても、本来の感謝の気持ちを持って生きる態度を大切にしています。クリスチャン信仰の基本は、天地をお造りになった神に感謝を捧げながら、喜んで生きることです。神に生かされていること、命を与えられていること、必要な食べ物と着物と住むところを与えられ、共に生きる人たちを与えられていることを喜び、神を賛美することです。これは古来の日本人の信仰と基本的に共通するものです。その共通点を取り上げて、そこから天地創造の神について語るべきです。

ただ残念なことは、私たちのペンテコステ信仰はどちらかというと、むしろ御利益信仰に近いところがあることです。ペンテコステ信仰は、ただ、人間を愛し、優しく微笑んで遠くからご覧になっている、恵み深い神では満足できません。一人ひとりの必要に直ちに応えてくださる神、癒しと奇跡とをもって助け、富と繁栄をもって報いてくださる神でな

ければ納得しないわけです。ペンテコステ信仰のすべてが悪いというのではありませんが、まず、神に生かされている喜び、感謝と賛美を捧げて礼拝することが基本であることを確認しておきたいものです。とはいえ、切迫した必要に応えてくださるのもまた、私たちの神様です。ペンテコステのクリスチャンは、新興宗教的な感覚の日本人にも、充分に説得力を持つものだと思います。要するに、日本人が信じている神を直ちに否定するところから入るのではなく、共通要素を見いだして、そこから話を続けるのがよいということです。

昔、沖縄の田舎で訪問伝道をしていたとき、占いを生業としている、カミンチュウ（神人と書く）と呼ばれるお婆さんの家に行き当たりました。お話を聞くと、彼女の家は代々カミンチュウの家系で、彼女も５歳のときからカミンチュウの働きをはじめ、結婚して子どもも出来ないうちに寡婦となってからも、ずっとカミンチュウとして生きてきたということです。しかも、ずいぶん名を知られ、離島のほうからも訪ねてくる人たちがいたほどでした。仕えている神様がとてもよい神様で、非常に御世話になっているということでした。

わたしは、彼女の神様について、悪口や批判がましいことは一切言わず、「いい神様で良かったですね」と相槌を打ち続ける一方で、天地をお造りになった神様の話をしました。楽しくお話が出来たので、そのあと何回も訪ねてイエス様の話もたくさんしました。その結果、彼女はイエス様を信じる決心をしたのです。

でも、それからちょっと大変なことがありました。あるとき彼女を訪ねると、暗い顔をしてぽつねんと座っているのです。「どうしたのと尋ねると」、「私が長いこと使えてきた神様が、夜な夜な枕元に立たれて恨みごとをおっしゃるのです」というのです。「私は、先祖代々から、お前の家を助けてきた。お前も５歳のときから、私のおかげでカミンチュウとして、生業を立ててきたではないか。私がいままで、何かひとつでもお前に悪いことをしたことがあるか。それなのに、どうして今になって私を捨て、キリシターの神（キリスト教の神）を信じるのか」

その神様は、このところ一週間ほども毎晩現れて、同じように恨み言をおっしゃるために、夜も眠られず弱り果てているということでした。なんと答えていいかわからず、時間稼ぎのために訪ねてみました。「その神様はどのようなお姿をしていらっしゃるのですか？」「白い長い髪の毛を垂らし、白い長い髭を生やし、白い長い衣を着ておられ、手には先が丸く曲がった長い杖を持っていらっしゃいます」　私は中国の仙人の絵を思い浮かべ、多分、彼女の潜在意識の中にも、同じ絵があるのではないかと思いながら、名案を思い浮かべました。多分、神様がひらめきを与えてくださったと思っています。

「ではその神様は、今晩も現れることでしょうね。もしも現れたら、このように言ってご覧なさい。そうしてどうなるか見ましょう。『神様、本当に長い間大変御世話になりました。なんとお礼を申し上げたらよいのか分からないほどです。でも、キリシターの神様を信じたら、永遠の命をいただけるということなのです。そこで、お尋ね申し上げますが、あなた様にお仕えして行くと、あなた様も、私めに永遠の命を下さるのでしょうか？』」

一週間後に訪ねると、彼女は晴れやかな顔で迎えてくださいました。「あの晩も、神様はあらわれました。それで、教えられたとおりに申し上げたのです。『永遠の命を下さるのでしょうか？』と。　すると、神様はとっても悲しい顔をなさったかと思うと、スーッときえてしまわれたのです。それっきり、現れなくなりました。もう安心です」

この場合、私は彼女が仕えてきた神様について、一言も非難がましいことは言いませんでした。彼女に、伝えたのは天と地をお造りになった神様、そして、私たちを愛し、イエス様を十字架に付けてくださった神様です。彼女はこの神様を信じたのです。その後も、彼女が長いあいだ仕えてきた神様には何の悪口も言わず、常に尊敬語、丁寧語を使いました。それは、その神様を敬っていたからではありません。彼女の心を思いやったからです。彼女は長い間、自分の神を信頼し、感謝しながら生きてきました。その感謝と信頼を、正しい神様に向けさせ、いままで正しい神様を知らないで、不義理を重ねてきたことをお詫びしただけです。彼女はキリストの神様につまずくことはまったくなく、それから間もなく、御許に召されて行きました。

多くの日本人が、ミレーの描く素朴な農村の絵に心を温められます。それは、そこにあふれている情緒が、日本人の世界観、宗教観と共通するからでしょう。特に晩鐘という絵には、作物を育て収穫を与えてくださる神に対する、農業を営む夫婦の素朴ながらも深く力強い信仰が感じられます。すでに農業を離れてしまっている多くの日本人が、今でも、この絵に共感を覚えているのです。私たちが西欧プロテスタントの神学を振りかざして、日本の信仰を粉砕してから、天地の造り主である神を紹介しようとするのではなく、ミレーの絵に見られるような素朴な信仰の姿をもって、情緒的に天地創造の恵みにあふれた神を語ったならば、もっと多くの日本人がクリスチャンになれたことでしょう。くり返しますが、敵対しながら語るよりは、共感を持って語り合うほうがずっと理解され、また受け入れられるのです。

私たちは天地創造の神を、人間が幸せに生きることを望み、あらゆるよいもので人間の周りを取り囲んでくださっている、優しく、祝福にあふれた神としてお話したいものです。罪だ、刑罰だ、犠牲だ、十字架だ、悔い改めだ、偶像の廃棄だと矢継ぎ早に、日本人にはなじみのないキリスト教神学の主題をぶつけるのではなく、感謝しながら生きることを大

事にする日本人に、聴きやすく、とっつきやすく、分かりやすい話し方をするべきです。たとえ人間がどのように悪いことを繰り返し、失敗を続けても、なお大きな心をもって人間を赦し、受け入れ、祝福していてくださる神、変わらない慈悲と恵みをもって取り扱ってくださる神であることを伝えるべきです。悪い者を厳しく罰する神について話す前に、悪いものにもよいものにも太陽を昇らせ、雨を降らせて下さる神様について語るべきです。

日本人は、春には春を来たらせ夏には夏を来たらせてくださる神を崇めてきました。荒らぶる神が悪さをして、台風が襲い、害虫が発生し、日照りが続き、冷害が痛みをもたらすことがあっても、恵みに富む大きな神はそれらを越えて祝福を与え、自分たちを生かし支えてくださっていると感じています。荒ぶる神々がどれほど危害をもたらそうが、大きな神は彼らの危害を修復し、また、もとのように恵みを持って被ってくださる神なのです。

１０．　ゆっくりと時間をかける

キリスト教的文化というか、キリスト教の教えが社会の中に馴染んでいる中では、人々は比較的容易に、あるいは短時間に神を理解し、キリストを理解し、罪と赦しを理解し、クリスチャンになる決意をします。教会にも違和感を持たずに来ることができます。ところが、日本ではそうはいきません。キリスト教を背景にした文化や、キリスト教が大発展をしている土地から来た宣教師たちは、「神はアメリカも日本も同じ。韓国も日本も同じ。アメリカ人を救ってくださった神は日本人も救ってくださる。韓国に大教会を建ててくださった神は、日本でも同じことをしてくださる」といって伝道の働きをしだすのですが、すぐに挫折してしまいます。神は同じです。でも、人間が違うのです。

日本は他の国々と違って、キリスト教に対してとても苦い思いを持っています。一人ひとりの日本人が自覚していることは少ないのですが、日本人社会として、文化として、キリスト教に対する恐れと不審、底知れない恐怖と不信感が心の底辺に横たわっているのです。それは二度にわたるキリスト教の伝播が、西欧植民地主義の手先としての役割を果たしていたために、二度とも、国家的な反キリスト教政策が採られたためです。徳川幕府はポルトガルやスペインの侵略から日本を守るために、厳しい弾圧を行いました。宣教師はことごとく追いはらわれるか殺害されました。日本人信徒は転向を強いられ、従わないときは容赦なく殺害されました。隠れている信徒は相互監視システムによって狩り出されたために、日本中に疑心暗鬼が行き交い、キリスト教に対する暗く陰鬱なイメージが定着しました。明治政府は西欧諸国との交渉もあって、そこまで厳しい迫害をすることは出来ませんでしたが、和魂洋才というスローガンと国家神道をもって、残忍な植民地政策を推進し続けていた西欧キリスト教諸国の侵入を、かなり効果的に防ぐことができました。このような国の宣教は時間を要します。あわててはいけないのです。性急な伝道は多くの害を

生み出します。

現在の日本は、先に述べたようにアブラハムの時代に似ています。だれも、真の神を知らないで、様々な神々を礼拝しているのです。そのような人々の中から、神はアブラハムを選び出しました。多分、多くの人々と同じように良く分からないまま、異なった神々を礼拝していたのでしょう。しかし神はアブラハムの真摯な礼拝態度をご覧になって、ご自分の民の父とするにふさわしいと、お選びになったのだと考えられます。選び出した上で、神は少しずつご自分を現し、アブラハムを正しい神信仰へと導いてくださったのです。

ところがアブラハムが本当に正しい神信仰を持つに至るまでは、非常に長い年月が必要でした。アブラハムが、どれほど神についての正しい知識を持っていたかは、定かではありません。彼の神知識は頭による理解よりは、体験を通しての理解だったと思われます。アブラハムの子孫が、ただ天地創造の神だけを礼拝しようと決意したのは、アブラハムが召しだされてから 130 年から 150 年ほども経って、孫のヤコブが自分たち一族の中から偶像を持ち出して、すべて、樫の木の根元に埋めてしまったときです。でもそれで、ヤコブの一族が唯一の神だけを信じるようになったのではありません。ヨセフはエジプトの宗教の祭司の娘と結婚しました。さらに 400 年ほども後に生きたモーセも、ミデアンの宗教の祭司の娘と結婚しています。天地をお造りになった神に対する知識も、礼拝も非常に程度が低いまま時が流れていたのです。

現在の日本人の宗教認識は、アブラハムが召されたときと大差ありません。その上、キリスト教に対する強い負のイメージがあります。そのような環境で、日本人がすぐさまキリスト教の神を理解し、信じ、受け入れると考えてはなりません。ゆっくり時間をかけて、キリスト教の神ではなく、聖書に記されている天地創造の神、日本人が昔から知らないまま感謝を捧げ、拝んできた神について、しっかりとお話していくことが大切です。幸い、アブラハムの時代と違って、私たちは聖書を持っています。神様についてのたくさんの知識も体験も持っています。また、日本人の知識も理解力も、アブラハムの時代の人々よりは格段に上です。ですから、可能性は大いにあるのです。

ただし、性急な悔い改めと決心を迫る西欧的な伝道方法、キリストの十字架と贖いの知的理解を中心にするプロテスタント神学の伝道方法から、もっと日本人にあった感覚をもった、穏やかな伝道方法に切り替えることが肝要だということを、再確認しておきたいと思います。

１１． 畏（おそ）れと穢（けが）れの感覚を大切にする

キリスト教が嫌われる理由の一つは、なんでもすぐに罪にすることです。酒も罪、パチンコも罪、同棲も罪、出来ちゃった婚も罪、媚を売るのも罪。一昔前なら、タバコも罪、映画も罪、マニキュアも罪、ミニスカートも罪でした。仏壇を持つのも罪、朝夕に水とご飯を上げるのも罪、仏教式の御葬式に出るのも罪、御宮参りは罪、御雛様を飾るのも罪。ところが日本人は、自分が罪人だといわれると、大概気分を害します。むきになって反発する者も現れます。でも、西欧プロテスタントの伝道では、罪の悔い改めのない救いはあり得ず、罪を指摘し、罪の自覚を持たせない伝道は伝道にはならないために、とにかく罪と思えるものは何でも槍玉にあげて、「罪、罪」と責め立てることになります。

ただ、一般的な日本人が罪と言われて思い起こすのは犯罪(crime)であって、聖書が教える意味での罪(sin)ではありません。多くのクリスチャンもまた、罪を正しく理解していないように思います。日本人が理解できる最もよい言葉は、多分、罪ではなく穢れでしょう。穢れとは、ただ汚（よご）れているということではなく、見えない大きな存在、「なにごとのおわしますかは知らねども」と詠われた、良くは分からないけれども心が感じる、畏れ多くもかしこい方のみ前に出るには、自分は相応しくないと感じる感覚です。自分はこの大きな方を直接、拝し奉（たてまつ）るには不充分である。それだけの価値がないと感じる思いです。自分の生活が、あるいは自分の存在が、大きな存在の恵みに浴するのは、ただただ哀れみによるのであって、自分がこの方に何か申し上げるなど、畏れ多く、出来ることではないとかしこまる感覚です。その上で、この清く気高く尊い方のみ前に出るには、自分の存在は多くの悪い思いや行いで、穢れているという自覚です。

ほとんどの民族と同じように、日本人にもこの穢れの自覚、穢れの思想があります。罪の自覚は持っていなくても、穢れの感覚は持っているのです。そのために、神社の前には清水が置かれ禊（みそぎ）が出来るようになっています。手を洗い口を漱（すす）いでから御参りするのです。そのほか、神道の感覚の禊に通じる儀式は様々なかたちで、全国いたるところに残っています。あるところでは滝に打たれ、あるところでは自分の身代わりの人形を作って川に流します。生け贄（にえ）をささげることさえあるのです。この、大きな存在者の前に自分は相応しくないという穢れの感覚は、まさに、聖書がいう罪の感覚に近いのです。犯罪の感覚とは少しばかり違います。罪人と言われて腹を立てる人でも、身と心を清めることには同意するのです。

その穢れの感覚を掘り起こし、日本人が潜在的に持っている罪意識を明らかにし、天地創造の神のみ前では穢れている私たち、その祝福にあずかるには相応しくない私たち、また、それにも拘わらず私たちを祝福し救おうとなさる神について語ることができます。その上で、その穢れを完全に洗い流すキリストの血の清めについても、あまり大きな思考的宙返りや、感情的ウルトラ C をくり返すことなく、理解しやすく語ることもできるはずで

す。その場合でも、神社の前の水は穢れを清めることは出来ないなどと、否定的な、躓きになるようなことは言う必要はありません。それはむしろ、穢れ自体を取り除くものではなく、穢れを取り除く象徴的行為として行われていると、考えればよいのです。神社に詣でることが本当に神に詣でることなのか、あるいは神に詣でることを象徴しているに過ぎないのか、神道では明らかではありません。尋ねられたら、「多分それは、神の前に出るためには穢れを洗い流す必要があることを、象徴的行為によって教えているのでしょうね」と答えればよいだけのことです。そしてそこから、わたしたちは、天地創造の神のみ前に出るためには、わたしたちの穢れを清めてもらう必要があることを語り、キリストの血潮がすべての罪穢れを清めるという事実を語り、神がそのキリストの十字架を準備してくださったという事実を語ればいいのです。

罪人を近づけない神を語るにしても、猛々しい怒りの神として語るのではなく、人間を滅ぼさずに救いに入れようと、一時的に遠ざけておられる神として語ることができます。何とか人間を近づけさせ、人間に近づこうとしておられる神の姿も、日本人が持っている穢れの感覚を通して語るならば、容易に理解してもらえます。そして、そのけがれを取り除き、人間が何の恐れも躊躇も持たずに神に近づき、神をほめ、称え、崇め、礼拝し、神の祝福を満喫することが出来るようにするために、神が身代わりの犠牲として、キリストを十字架にかけてくださったという話も、あまり理論的飛躍と情緒的高飛び込みをくり返さずに、受け入れてもらえるはずです。

キリストの贖いが理解されたならば、神はもはや恐れの対象ではなく、本当の意味での畏れの対象になるはずです。そしてその神が、わたしたちと共にいてくださり、私たちの内に住んでいてくださるという驚くべき事実が、福音となって迫るはずです。

結び

日本人として日本人に福音を伝えるために、どういう態度と心がけで接し、どう話すべきかを考察してきましたが、ここで、私たちが信じている神をどのような神として語るべきかを、おさらいの形で記しておきたいと思います。

①　昔から日本人が拝んできた神　日本人はまじめな民族です。宗教においても、多くの場合とてもまじめです。見えない大きな神を感じ、見えないまま、また理解しきれないまま、感謝を捧げ、喜びを表現し、崇め、礼拝してきました。その日本人が分からないまま崇め畏れて来た神こそ、わたしたちクリスチャンが信じている神です。私たちは外国の神を連れてきて、この新しい神を信じなさいといっているのではなく、日本人が昔から拝んできた神を、もう少し良く理解した上で一緒に拝もうと言っているのです。日本人は、

この神を良くは知らないまま、分からないまま拝んできたために、いろいろな混乱があり、間違いもありました。でも、聖書にはこの神のことについて詳しく書かれているために、私たちはもっとよく理解し、より正しい方法で礼拝と感謝を捧げることができるのです。その結果、さらに深く神を理解し、豊かな祝福をよりいっそう豊かに受け取ることが出来るのです。

② 天地をお造りになった神　日本人がよく分からないままに拝んできた神は、私たちが信じて拝んできた、天と地をお造りになった大きな神です。昔から日本にいて、日本を祝福し、太陽を昇らせ、雨を降らせ、山々と森と林を与え、海を与え、豊かな収穫と豊漁で日本人を喜ばしてきてくださった神です。小さな神ではなく、ご自分がお造りになった天と地を、今も支配しておられる神様です。私たち日本人を愛し、日本人が正しい神礼拝をし、神の祝福をより豊かに受け取ることを望んでおられる神です。そして私たちの祈りと願いを聞き入れてくださる神です。天地をお造りになった神に不可能はありません。私たちのすべての問題に心を留め、あらゆる必要を満たしてくださることが出来る神です。

③ 目に見えない神　日本人は、目に見えない神を感じ、目に見えない神を拝んできました。その目に見えない神こそ、わたしたちクリスチャンが信じている神です。天と地をお造りになった神は、天と地という言葉で表現された宇宙よりも大きい方、空間という概念を越えた方です。また、天と地をお造りになる前から存在された方、時間というものを超越しておられる方です。さらに、天と地という物質を物質のないところから出現させた、物質の世界を超えた方です。神は次元を超えて存在される、非常に大きな方です。この大きな方を、ちっぽけな器官に過ぎない目、光の反射しか捕らえることが出来ない私たちの目が、捕らえることは不可能です。有限な目で捕らえられる神は有限の小さな神に過ぎません。日本人が心で感じ崇めてきた神は、そんな小さな神ではありません。目に見えないからこそ神なのです。

④ 人間をご自分の姿に似せてお造りになった神　人間は神の性質を持っています。神は物質の次元を超えた霊的な存在です。人間も動物の一員として肉体を持ちながら、神の性質である霊を併せ持っているものです。人間だけがそのような性質を与えられた動物です。そのために、すべての人間は、人種や文化や言語、さらには場所や時代を超えて、常に神を感じ、何らかの形で神を礼拝する本能を表現してきました。すべての人間は宗教を持っているのです。人間は、まさに祈る動物です。また人間は愛である神に似せて造られているために、互いに愛し合う本能を持っています。ですから人間は社会生活をします。一人では生きていけません。ところが人間は、争いと、憎しみと、ねたみと、あらゆる悪を持ち込み、人間社会を破壊してしまいました。また、正しい神の知識を失い、神によって生かされていること、必要なものを与えられている事実を軽く考え、忘れ、ないがしろ

にしてしまいました。人間は自由な生き方を始めたのです。でもそれは本来の人間の姿を離れる、人間として間違った生き方でした。そのために、人間の心には神の前に自分は不完全だ。何かが間違っている。何かが足りない。神に顔向けができないという意識、穢れの意識、あるいは罪の意識とでも言うべきものを持つようになったのです。

⑤　人間に近づこうとしておられる神　神は人間の穢れ、あるいは罪にもかかわらず、人間を愛し、人間を祝福し、人間が幸せに生きることを願って来られました。そのために、太陽を昇らせ、雨を降らせ、あらゆるよいもので包んでくださったのです。また、人間が神様を礼拝し、神様の愛と守りを感じて、本当に幸せを実感できることを願い、人間に近づこうとして来られました。また人間の、神を礼拝したいという本能をかなえ、神との交わりの中に、充実感を持つことができるように、人間をご自分に近づくことが出来るようにと望んで来られました。そのためには、人間の穢れ、人間の罪の問題が解決されなければなりません。神の聖さは穢れた人間を近づけることが出来ない、厳かなものだからです。そこで神は、イエス・キリストをこの世に遣わし、人間の穢れと罪を負わせ、十字架で身代わりに殺されるように、取り計らってくださったのです。そのために、いま私たちはこの神の取り計らいにも感謝を捧げながら、穢れと罪のための神に対する恐れを捨てて、喜びを持って大胆に神のみ前に出て、賛美を捧げ、礼拝を捧げることが出来るのです。そして神は、そのような礼拝を心から喜んでくださるのです。

⑥　無代価で救ってくださる神　私たちの穢れと罪を処理してくださるために、神はキリストを十字架に付けて殺すという、大きな犠牲を払ってくださいました。神が私たちの問題を解決し、神に近付けるようにしてくださったのです。これは、神の一方的な御取り扱いで、神が必要なことをすべてやってくださったのです。人間に出来ることはただ感謝をして神に近づくだけです。私たちは、昔から日本人を愛し、日本を祝福してきてくださった神、あるいは日本人に親しまれ、日本人が拝んできた神が、これほど愛に満ちた神であることを聖書によって教えられるのです。今まで以上に大きな感謝を持って、礼拝したいと思うのです。まだまだ深い教えのすべて、神のすべて、そして神がしてくださったことのすべてを理解したのではありません。ほんのわずかだけ知ったに過ぎません。でも、いま神に近づき、神を礼拝するにはそれで充分です。まず、私たちの神は天地創造の神であることを認め、天地を創造してくださった神様と呼んで、心から感謝と礼拝を捧げ、神様の恵みと祝福をもっとたくさん味わって行くことこそ、大切なのです。そのようにしながら、さらに深く、神様とその祝福について学んで行けばよいのです。

私たちは、日本人にわかり易く受け入れやすい形で、福音を提供したいと思います。日本に来たばかりの普通のアメリカ人に、いきなり、日本人が愛してやまない生け作りを食べさせようとしてはなりません。まず、魚料理そのものに馴染みの薄いアメリカ人に、分

からないように幾度も魚料理を食べさせ、それからしばらくして、魚だと分かる料理にも親しませ、魚がおいしく感じられるようになってから、刺身のおいしさを理解させ、頭も目も気持ちも舌もすっかり魚に馴染んでから、生け作りを出してあげる心遣いが必要です。すると、あの、まだ口をパクパクさせている魚を見ながら、その身をおいしく食べられるようになるのです。福音という素晴らしい料理を日本人に提供するときも、それと同じだけ、いや、それ以上の注意深さが必要なのです。